

海亀の浜

天然記念物の動物たち

畑 正憲



アユモドキ

死滅への森

甲斐^かの犬^い

鮒^{ふな}の沼

カジカの里

クマゲラ巡礼

海亀の浜

うみ がめ はま
海亀の浜

天然記念物の動物たち

はた まきのり
畑 正憲



角川文庫 9010

平成五年五月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七一八四五—

営業部(〇三)三八一七一八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——文宝堂

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

海亀の浜

天然記念物の動物たち

畑正憲



角川文庫 9010

◆目 次◆

甲斐の犬	5
------	---

死滅への森	95
-------	----

アユモドキ	129
-------	-----

カジカの里	161
-------	-----

海亀の浜	195
------	-----

クマゲラ巡礼	253
--------	-----

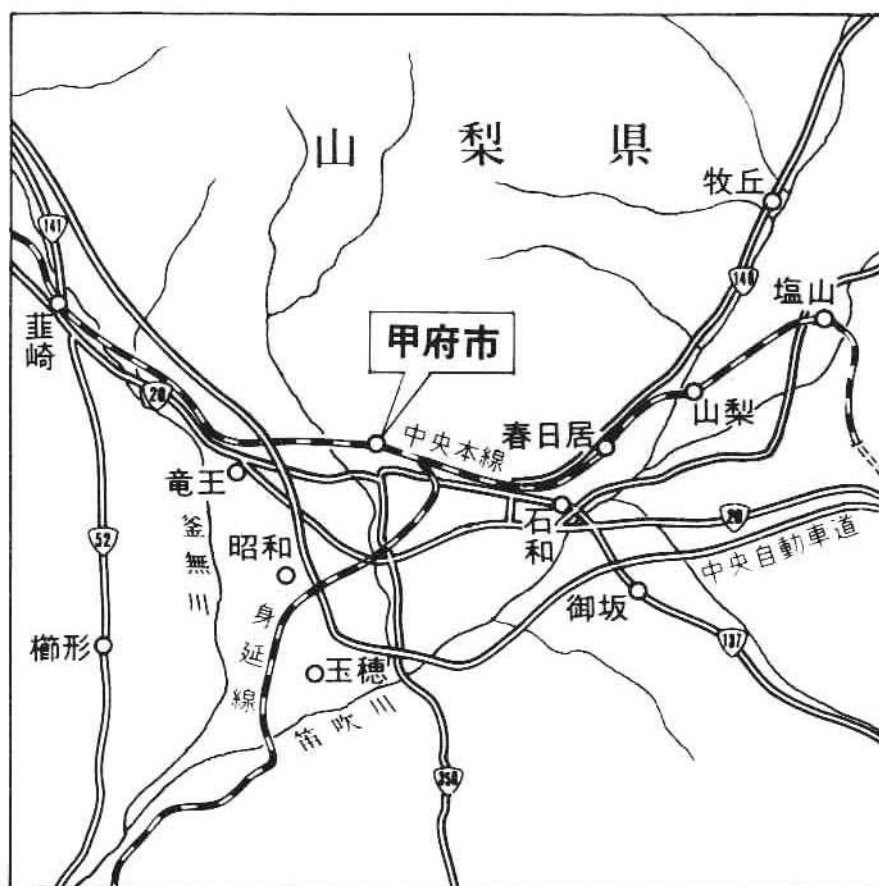
鮒の沼	285
-----	-----

撮影
写真提供

石川 利昭
ネイチャー・
プロダクション

甲斐の犬





I

陽が斜めに射しこんで、座席の背にかけられた白い布に反射してまぶしいぐらいだった。列車は空いていて、三つ前の席まで誰も坐っていないかった。その前の席で、ハンチングをかぶった男が煙草を吸っていた。その煙があざやかな紫色の雲となり、光の束で遊んでいる。

窓外の風景はブルー。

地上には春がすみが厚くたなびき、それに空の青さがしみこんでいる。空はまた、地上の白を映してか、青に白のブラシがかかっていた。

やがてその青の中間に、輝く銀の線が見えてきた。南アルプスの峰々だった。

桃の花が満開だった。枝という枝が花の色で塗りつぶされている。新宿から急行で一時間半走っただけで、私たちは甲斐の国に入っているのである。甲府は近くなり、とふと思った。

甲斐犬を初めて見たのは、十余年前、まだ横浜にいた頃だった。友だちづき合いをして、いた獣医さんが、珍しい犬が入ったから見にこいというので、とんで行くと、粗い虎毛の小ぶりの犬が入院していた。

「なるほど、なるほど」

と、私は頷うなずいて、しばらくの間、遠くから眺ながめていた。

獣医がからかった。

「珍しいでしょう。狐きつねとの雑種ですよ」

「キツネ？」

私はにやりとして、キツネじゃなくて、狼おおかみとの雑種でしょうと冗談を返した。

黒の虎毛が、粗野と言ってもいいほど、犬を野性的に見せていた。目と目の釣り合い具合が、柴犬しばや紀州犬きしゅうとは違っている。バランスが悪かった。間隔が開き過ぎているようでもあった。口は広く裂け、耳がきちんと立っている。

江戸時代えどに、一見、狼かなと疑う、山犬の絵が何枚も残されている。その姿によく似ていた。

恐ろしげに見えるけれども、その犬は人なつこく、むしろ臆病おくびょうであることを私は見破っていた。尻尾しっぽや耳、目の表情、脚あしの曲げ具合など、全身の表情がそれと分るのである。

「これがカイケンですか。実は、はじめてなんです、実物を見たのは」

と、私が言うと、

「カイイヌと言います」

獣医が犬の顔をなでた。

私も犬の前に坐りこみ、頭をなでてやる。犬は、頬ほおをこすりつけて甘えた。

寂しいし、不安なので、余計に甘えるのである。飼主からはなれて、他の犬のにおいが充滿している場所に移っているの、人の情けが欲しいのだ。

「虎毛とらけというのは勇ましいですね」

「いいでしょう」

「今度、ぼくのグル（秋田犬）には、虎毛をかけるかなあ」

すぐそれを実行し、グルは六頭の仔こを持ち、そのうち二頭が虎毛であった。

見事な方は浜の漁師に貰もらわれ、タツと名づけられ、十一歳まで生きた。

私は甲斐犬かいいを抱いてみた。抱けば、犬であった。他の日本犬とさして変らぬ手ざわりだった。

「どうなんでしょうね。紀州きしゅうや柴と比べて、ここが違うという所がありますか」

「さあ……」

「第一印象だけから言うと、口の大きさや、顎あごの張り方が違うみたいですけど」

「いくらかね」

「頭骨のデータなどで、差がありますか」

「有意の差は出てないようですよ。朝鮮ちようせんの珍島犬ちんとうも含めて、日本犬のルーツは一つじゃないでしょうかね」

「大陸伝いにきたものでしょうか。それとも南の方から、陸伝いにきたものでしょうか」

「それは南でしょう」

「原始的なバリア犬がやってきて、全国に広がり、それぞれの地方で飼^かい継^つがれるうちにすこしずつ、品種に差異が出来上ってきたんですね。こうやって甲斐^{かい}を見ると、紀州とは違う感じが確かにします」

「本質的には同じですがね」

「それはそうでしょう」

品種と品種の間に、はっきりとした、これが決め手という差があるわけがない。犬は、犬なのである。けれども犬好きは、僅^{わず}かにある品種と品種の差、その差に惚^ほれこんでしま^うのだ。

ダックスフントこそ犬だと信じこんでいるものもいる。彼は言う。

「シェパードですって。何ですかあれは。大きな図体をして大メシぐらいで、チャカチャカうるさいだけじゃありませんか。ダックスを一度飼ってごらんさい。そのしつとりとした味わいを知ったら、これが犬だと目からウロコが落ちる思いがするものです」

私は今、これでなくてはならないという犬種はない。三百近くある犬種のどれをとっても、それぞれに捨てられぬ味わいがあり、許されるならば、そのすべてを飼ってみたい気もしている。

馬^ば齡^{れい}を重ねるごとにそうなっていく。前は小型の犬なんて、甘えん坊の騒^{さわ}ぎたがり屋でしかない^{けいべつ}と輕蔑^{けいべつ}していた。犬は大型に限ると思^{おも}いこんでいた。けれども最近^{さいきん}は、小型のテリアを手元に置いてみたくなっている。犬属への思^{おも}いこみは、ますます深くなっていって

しまう。

甲斐犬とは、どんな犬だろう。

また、甲斐犬こそが犬だと思いこんでいる傾斜のきつい犬キチにも会ってみたくなかった。人と犬、両方に興味があった。

横浜の甲斐犬以来、私は何頭も見ているし、さわってもいる。『日本犬』という名犬写真集も出版されていて、甲斐犬愛護会の誇る犬の姿を眺めてもいる。その中で、茅姫という犬が、強くまぶたに焼きついている。

そろそろ旅に出ようよと相棒に相談をもちかけたのは、雪の季節だった。

彼は方々に電話し、

「いい人がいました。甲府こうふのTさんです」

「組織の人？」

「さあ……どうでしょう。JKC（日本ケンネルクラブ）に紹介して貰もらいましたから、会員じゃないでしょうか」

「たくさん飼ってるの？」

「四十頭ぐらい、いるはずだということでしたよ」

日本犬を承認する団体、つまり血統書などを交付する団体には二つある。JKCと日本犬保存会である。あるレベルから上の愛犬家は、そのどちらかの会員であることが多いのである。

どちらも立派な団体であり、犬の品種を保存し、犬との文化をつくり出す上で、貴重な活躍をしている。

しかし末端では、会員同士が仲が悪いこともあり、二つあることを知っていないと、情報にヒズミが生じる場合がある。

「ニッポですって？」

日本犬保存会の略称である。

「マニアの集まりで、国際的なつながりがないじゃありませんか。日本犬をどれもこれも一緒にし、雑交させ、姿形のいい犬をつくろうとしてる団体ですな」

また片方では、

「JKC? ああ、犬屋の集まりですね。あれはですね、犬を売る商売人、ペット屋が寄り集まってこしらえた団体ですよ。商売意識が強くなってね、われわれにはついていけませんよ」

などとののしりつつ、自分の道を突き進んでいる。

どちらの話も当たっていないのである。

だが、同じ道で二つの団体があると、中には軽はずみの悪口を言うものもいるのである。それをわざわざ記しるしておくのは、こういった発言を真に受けてしまうと、ものの見方が片寄ることを書いておきたかったからである。私もいっぱしの愛犬家だし、犬好きとつき合うことも多いので、ふっと悪意ある意見に判断が狂わされるのである。

まあ、というわけで、相棒にTさんの所属をまず訊いたのだった。列車は、春がすみの中を陽気に旅して、甲府の駅にすべりこんだ。

駅前には、信玄祭りの旗が立ち並び、春風の中ではためいていた。

気温が上がったせいも、もやが空へとかえり、白い北岳きただけがくっきりと見えるようになった。眠らぬまま、早朝の列車にとび乗ったので、喉のども渴かわいていたし、腹もへっていた。

駅前の喫茶店で、ブルーマウンテンを注文し、トーストを食べた。

Tさんの家は、なんと駅のすぐ近くにあった。タクシーで五分の距離である。電話をしておいたので、Tさん夫妻は、わざわざ外まで出迎えてくれていた。

にぎやかな商店街だった。十メートルばかり細い道に入ると、右手にソーブランドがあり、その前に急な階段があった。

「ま、どうぞ」

と、Tさんが先に立った。

階段の下で靴をはきかえ、その中間に靴を置くのである。

二階には、六畳間の中央にコタツが置かれていた。

「寒いでしょう、甲府は」

と、奥さん。

「とっても暖いです。北海道は、やっとシバレがとけた時期ですから」

「ああ、そうでしたね。わたし、本業は仏画を描いています」

Ｔさんが名刺をくれた。なかなかの偉丈夫だった。目は鋭く、個性の強さを教えていた。私はさっそく切り出した。

「甲斐犬は、飼い始めて長いのですか」

「そうだね、ずっとだね」

「昔からですか」

「動物好きだったもので」

「犬以外のものも」

「熊を飼ってたよ。こーんな」

と、Ｔさんは両手で六十センチぐらいサイズを示し、

「熊を、町の中を連れて歩いたりしたな。よく馴れて、おれたちが行くと、お坐りもしたし、おじぎもしました。熊は、賢い動物だと思うよ。それを日本人は、野生動物と見たら殺すからね。いかんと思ってますよ。動物は残さねば」

「私もそう思います」

「熊は賢いなあと思ったのは、うちの母が片手を喰いとられた時でした」

「え、片手を」

「そうですよ。丁度、肩の下あたりからとられてしまいました。ザクザクに噛まれてです」

「それはまた、ひどい事故ですね」

「それがですね、前の年の秋、オフクロが、柿かきを投げて与えたって言うんですね。それが檻おりの棒に当って、砕けちゃったんです。オフクロは、こんなもの、もうダメだと、ぽーんと足で蹴けってどぶへでも捨てたんです。熊はそのうらみを忘れていませんでした。次の年、オフクロが檻に近づいた時、ガッとやっちゃいました」

「命に別条は？」

「いいえ、ありませんでした。行ってみるとプールに人の肉が浮いてるんですよ。それをすくって、熊の奴やつ、食べていました」

「……………」

「動物園に貰もらってもらいましたが、狼おおかみも二頭飼かいました」

「何狼でしょう」

「はあ？」

「シベリアのものですか。それとも、アメリカのものですか」

「さあ、どこでしょう。一頭は、旭川あさひかわの動物園からきました。一頭は東京の業者に頼んで、外国から輸入したんです。高い金がかかりました」

「なんでまた狼を……………」

「動物が好きですから」

「それは分りますけれども、その他ほかに、甲斐犬との関係を調べたかどうかではありません